

ジブチは、中国が台湾の喉に刺した棘

漢和防務評論 20180106(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

ジブチに建設中の中国海軍補給支援基地は、規模が大きく、「将来は、中国の”利益の国境”を守る中国海軍海外基地として機能させようとしている」と KDR は指摘しています。

また習近平の台湾問題解決の最終案は、台湾に対する大縦深の経済封鎖であり、台湾に対する石油輸送を制約するために、ジブチ基地を利用してアデン湾、アラビア海を支配するとの考え方です。

遠大な計画ですが、中国はその他の”利益の国境”付近にも逐次中国海軍海外補給支援基地を建設していくであろうと述べています。



建設中の中国海軍ジブチ補給支援基地 (Google Earth から)

KDR 香港編集部特電：

中国がジブチに建設中の巨大な海軍補給基地が逐次姿を現しつつある。陸軍或いは海軍陸戦隊が派遣したのは、8×8 輪作戦車、30MM 機関砲である。現在建設中であるとはいえ、少なくとも 9 機分のヘリ格納庫の建設がすでに完成し、滑走路 (R/W 09/27) の長さは 400M である。海岸線は明らかに軍港の建設が行われており、長さは少なくとも 300M 以上ある。建設する軍港の構造規模は不明であるが、もし 2 乃至 3 個の艦橋を開設するのであれば、長さ 150M のミサイル駆逐艦 4 乃至 6 艘が同時に補給を受けることができる。

ここは、中国海軍の最初の海外基地である。正式名称は、”中国海軍支援基地”である。実際の用途は、米軍が海外に開設した海軍基地の機能と同じである。この点は、基地建設の状況から見ることができる。中国はこの基地を、海賊対処のためアデン湾地区をパトロールする中国海軍艦船を支援する基地、と正式に表明している。基地建設の状況は、現在すでに司令部用建物が1棟建設された。一説によると、司令は大佐クラスであるという。また多くの大型倉庫があり、そのうち10個前後の倉庫は、大きさ及び外形が同じである。また多くの車庫がある。KDRは、不完全ながら海軍基地にするつもりではないか、と疑っている。戦略支援軍としての各種無線電施設、レーダー監視施設が同時に建設される可能性がある。ここで米海軍第6艦隊の各種通信を傍受するのである。基地が具備する補給機能は何か？単に燃料や食料品の補給だけか？弾薬もか？詳細に分析するためには、基地全体が完成するまで待たねばならない。海賊対処のためだけか？それにしてもこのような巨大な基地が必要なのか？中国海軍の近年の各種論文を閲覧すると、実際の目的は単純なものではないかもしれない。ジブチの戦略的位置は高度に微妙かつ重要である。単にアデン湾のネックに存在するというだけでなく、スエズ運河に出入りする全ての商船が通過する位置にある。サウジアラビアの海岸線の半分を監視下に置くことができる。同時に説明すべきことは：サウジは、台湾にとって最も重要な石油供給国であること。ジブチ基地は、オマーン湾の海岸線からわずか1900KMしか離れていない。そこはカタール、サウジ、UAE、クウェート等が台湾へ石油輸出する際の主要な通り道である。

中国海軍が海外に補給支援基地を建設する最も重要な理論的根拠を見て欲しい。近年の中国軍内文献、大量の論文はこの点について掘り下げて研究している。現在は、計画を実行に移す段階である。

第一、中国海軍は、海上の主要戦略経路を支配する必要性を認識している：大国の海上利益を確保する重要な手段は、海上の戦略経路を支配することである。16世紀の大航海時代から今日の新帝国主義の時代まで、その原理は全く変化していない。海上の戦略経路を支配することは、”利益の国境”の安全を確保し、”エネルギー安全保障”を確保することに等しい。このほか、戦時においては、敵国に対し、反封鎖、反制圧、戦略威嚇の作用をもたらすことができる、と。

このため、中国海軍は、国家経済、エネルギー戦略に直結する”海上の戦略経路”の地区と用語を定義した。”戦略経路”とは主として、中国の政治、経済、軍事戦略に密接に関わる狭隘な水道、海峡を指す。例えば、スエズ運河、マラッカ海峡、パナマ運河、ホルムズ海峡、アデン湾等である。全部で十数個ある。”利益の国境がどこにあらうと、中国海軍はその場所へ必ず出動しなければならない”この理論は、解放軍の官方出版物に公開されており、KDRは何度も分析している。

第二、海軍の”全地球への到達を目指す”理論である。この理論を提議した前提にあるのは、中国貿易の国際化、海上の生命線の全地球化である。したがって中国海軍は：中国の海上生命線、エネルギー生命線を確保するため、全地球のいかなる利益の国境へも直ちに対応、出動しなければならない、と考えている。

これがアデン湾での航海護衛、アフリカからの中国人労働者撤収に海軍を使用した理由である。

最後の問題は、現在最も現実的ないわゆる”国家安全”問題である。それは1990年代から提議された”台湾独立運動に対抗する軍事闘争準備”である。当時は、台湾のエネルギーに対する大縦深海上封鎖構想が提議された。しかし当時の中国海軍は弱体であったため、”大縦深”の概念は今日とは違っていた。1990年代の”大縦深”とはマラッカ海峡までであった。しかし現在の”大縦深”とは、台湾と密接な海上貿易関係を有するアラビア海、アデン湾まで拡大している。台湾と交易する全ての欧州、中東の商船は、特に石油タンカーは必ずインド洋、スエズ運河、ホルムズ海峡、アデン湾を通過する。これらの海上戦略経路を制圧されると、台湾の生存はどうなるか？

したがって中国海軍が提議した”利益の国境”とは、中国の利益の国境というだけでなく、当然台湾、日本、米国にとっても利益の国境となる。

過去10年間のアデン湾の航海護衛を縦観すると、実態は海上生命線の防衛であり、台湾のエネルギー封鎖の演練と見ることができる。通常は、1艘のミサイル駆逐艦、1艘のミサイル護衛艦が1回の航海護衛任務に就く。海上約9000KMの距離を進出し、アラビア海、インド洋、南シナ海で行動したあと帰港するまで1ヶ月掛かる。この程度の海上兵力では台湾に対する大縦深海上封鎖は当然兵力不足であり、対応速度も不十分である。

しかし、一旦ジブチに2乃至4艘以上の大型水上艦を常駐させ、また将来は潜水艦を進出させれば、台湾の海上貿易は、特にスエズ運河を通過する海上貿易は中国海軍に支配されることになる。

中国は、習近平の任期内に、強大な軍事威嚇力を背景に、”台湾独立運動に対抗する経済闘争準備”、”台湾独立運動に対抗する外交闘争準備”を推進し、台湾当局に対し政治交渉に応ずるよう、また中国が提議した統一条件を飲むよう迫る可能性がある。これが習近平が5年以内に実施する”台湾問題最終解決案”の骨子である。”台湾独立運動に対抗する経済闘争準備”とは、”大縦深の海上封鎖”と一定の”貿易制裁”等である。

ジブチに建設した中国初の軍事補給支援基地は、その第一歩に過ぎない。中国は、長期的観点から急がずに多くの海軍海外補給支援基地を造ろうとしている。内部論文によると、その理由は、海外基地建設の経験不足にある。そのほかの理由として、急いで建設すれば中国脅威論を助長するからである。したがってKDRは次のように予測する：中国は、ジブチで海外軍事基地の管理に関して経験を積んだあと、”戦略利益の経路”付近に海外補給支援基地を徐々に建設しようとするであろう、と。

以上